

## 自由研究発表要旨

## 北部ベトナムにおける「伝統」復興に関する一考察

小川 有子(東京大学大学院)

「伝統」の復興・創生とは、いかにして起こり、それはその社会においていかなる機能を持つのであろうか。北部ベトナムの多くの地域において、1980年代後半に始まった改革開放政策であるドイモイ路線の採択以降、家庭や村落のレベルで、祭礼や儀礼等さまざまな「伝統」の復興が、顕著な社会現象として起こっている。この現象は、なぜ、どのように起こり、どのように機能しているのであろうか。ベトナムにおける「伝統」的社会構造、宗教・儀礼等については、植民地期から現在に至るまで国内外に研究の蓄積があるが、そこではこれらと社会変化との相関についてはほとんど触れられていない。またベトナムにおける宗教の復興・再生については、キリスト教を中心に若干の論文が存在するが、それらはフィールドワークを基に構築されたものではなく、またもっぱら国家の宗教政策の変遷が主題となっている。ここでは、北部ベトナムの村落祭礼と、それを執り行う共同集会所「亭」が、1945年8月革命以降現在に至るまで、どのような変遷を遂げてきたかを追うことにより、復興の実態と要因を検討する。

1945年以前、村落はムラ独自の神を守護神として祀り、その自治は村落の共同集会所である亭を中心に執り行われていた。守護神と村落祭礼をめぐる独自の規則を持つ、村の外部への排他性、祝祭が生み出す共同体内の相互的横関係は、村の共同性・アイデンティティを創出・維持する装置として機能した。同時に守護神と祭礼は、村落内の社会秩序と祭祀を独占するエリート層から成る祭司グループの特権を、正当化してきた。こうした村落の構造は、8月革命以降どのように変化したのであろうか。1945年以降ドイモイまでの期間を「伝統」の「断絶の時代」と捉え、この時代を革命・階級闘争期(1945年～50年代後半)、集団農業・戦時総動員体制期(1950年代後半～75年)、国家政策による禁止期(1975年～80年代半ば)の3段階に区分し、祭礼と亭の変化、社会状況の変化を検討する。その後の「復興の時代」にベトナムは、東側陣営の崩壊に平行し、自己のアイデンティティを一時的な社会主義的世界観から独自性へと求め始め、国家は一部のベトナム的「伝統」的生活・慣習を容認し始める。国家レベルの変遷に平行し、2カ村でのフィールドワークを基に、村落内ではどのような変化があったのかを追う。

現在、村落祭礼や亭が復興しつつあるが、それらをめぐる村落・国家の社会環境は、断絶以前から大きく変容している。祭礼において一部切り捨てられるもの、新たに創出されるものなど、村落祭礼の要素は人々の欲求・社会状況に合わせて取捨選択されている。村落祭礼は現在、他の共同体との差異化をはかりアイデンティティを確認するもの、新時代の娯楽、として機能していると言えるだろう。

## ルイロウ城:紀元後1000年紀前半の紅河デルタの城郭とその周辺

西村 昌也(日本学術振興会特別研究員)

ルイロウ(Lien Lau)古城址はバックニン(Bac Ninh)省のThuan Thanh(トゥアンタイン)県の旧ザウ(Dau)川わきの自然堤防上に位置している。漢書から南北朝代の各史書に記される羸ロウ(Lien Lau, LuyLau)県の中心地と比定されている。前漢代のある時期から、後漢代まで交趾郡の郡治でもあり、後漢末から三国初頭の交州太守として威をふるった士燮の

治所と考えられている(参考:桜井1979)。1999年の二回にわたる発掘調査は当城郭域の人類居住が先史時代に遡り、紀元後1世紀を本格的利用開始期とし、確実に4-5世紀前後まで存続したことを明らかにしつつある。城郭建設の時期に関しては紀元後2世紀を年代の下限としている。

第1発掘地点では当城郭内に広範囲にわたる青銅器鑄造工房があったことを明らかにした。工房の年代下限は、3-4世紀と考えられ、下層の未掘部分にさらに遡る鑄造遺構が確認できることから、工房の存続年代はかなり長かったと考えられる。また、当工房域の一角で筆者はヘーガーI式銅鼓の鑄型を確認している(Nishimura1998)。当鑄型は北部ヴェトナムを中心に発見されるドンソン型銅鼓の後期に相当するもので(今村1993)、その年代は当城郭の存続年代幅のなかに位置づけられる。従って、当城郭内には、ヘーガーI式銅鼓を制作する集団が中国系の青銅器を制作する集団と共存していた、あるいは同一であったと考えられる。また、Tra KieuやOc Eoと共通する遺物が発見されたり、出土しており、中国のみならず東南アジア各地域間との交流を雄弁に物語っている。

特に、インド系の文化遺物には注意を払う必要がある。北部ヴェトナム最初の仏教伝来地とされるDau寺は城郭のすぐそばにあり、もし、寺の位置が当時から変化していなければ城域内に存在していたと考えられる。城郭内の瓦当は蓮華文や人面文を用い、Tra Kieu同様に仏教等のインド起源宗教の臭いを濃厚に漂わしている。こうしたことから、このルイロウ城に存在した政権(例:土燮)はその政権下に多様な文化背景を持った集団を抱えていたことが推察できる。これは、当時の他の東南アジア初期国家と同様な状況であり、こうした状況を支えたのは紀元後2-3世紀において、紅河デルタ域が南海交易の中継中心地であったからであろう。これは該期の磚室墓がデルタ全域、特に交通の要所に多数確認されることに裏付けられている。しかし、3-4世紀のある時期から、この磚室墓は激減する。これは南海交易自身はその後さらに活発化するが、南海航路の変更(恐らく海南島西廻りルートから、東廻りルートへの変更)が紅河デルタの南海交易中継地点としての役割を大幅に減じたためであろうと考える。

また、土燮政権崩壊後は龍編が交州の中心地と考えられているが、考古学データはルイロウ城の機能がその後も城郭としての機能を維持したことを示している。おそらく、その後の紅河デルタの支配者(交州刺史など)が継続的に現ルイロウ城を中心的根拠地として利用したのであろう。龍編が後漢期以降の交趾郡郡治として機能していたことになっているが、郡治が実際は4-5世紀頃まで現Luy Lau古城であった可能性とてあろう。龍編と贏ロウをめぐる郡治位置比定なども、紅河デルタに内在した歴史状況から見直す必要がある。

桜井由躬雄(1979)らく田問題の整理 “東南アジア研究” 17-1:3-57

今村啓爾(1993)ヘーガーI式銅鼓東京大学文学部考古学研究室紀要

Nishimura,M. (1998) Re-evaluation of the archaeology of the Post-Dong

Son Period:a hypothesis for economic and residential history of the early historic period of the Red River Delta. Paper presented in the International Conference of the Vietnamese Studies, Jul,1998, Ha Noi.

Nishimura,M.(1998) Lien Lau城発見の銅鼓鑄型 Khao Co Hoc 1998 No.4